

## 中国5県絶景の旅⑦

### 「エディオンピースウイング広島」

#### ——広島の新しい歴史の幕開け

振り返ると、わたしは本誌でレポートするのは神社仏閣ばかり。個人的な好みなのであるが、歴史ある場所なので書きやすいという理由も大きい。今回は気分一新、広島の新名所、サッカースタジアムの紹介である。

振り返ると、わたしが本誌でレポートするのは神社仏閣ばかり。個人的な好みなのであるが、歴史ある場所なので書きやすいという理由も大きい。今回は気分一新、広島の新名所、サッカースタジアムの紹介である。

Jリーグのサンフレッチェ広島を応援する広島県民のひとりであるが、試合を観戦したことは一度もない。人が多

く集まる場所に行くのが苦手になってしまった。東京在住の時は、神宮球場にカープの応援に通っていたのだから、やはり年齢の影響が大きいのだろう。試合のない日もスタジアムに入場できると知って、行ってみたいと思うようになった。

半に激しい雨が降ったことを思い出した。駅員の人にバス便を勧められて、駅前のバス停から7時30分発の高速バスに乗った。芸備線利用が目的の一つだったので、三次駅でJRに乗り替えることも考えたが、降り降りするのが面倒で、そのまま終点の「広島駅新幹線口」まで乗車。以前は米子駅と広島駅を結ぶ「急行ちどり」が運行されていて、庄原駅から広島駅まで乗り継ぎなしで行くことができたが、今は三次駅で列車を乗り替える必要がある。バス利用が増える理由の一つだろう。日曜日のので、バスが停留する度に乗客が増えてくる。

9時40分、終点到着で降車。4

月に新装オープンした広島駅に行ってみる。駅ビルの2階の「自由通路」の人混みが凄い。インバウンドの外国人観光客の姿が目につく。体格が大きいので圧倒される。きらびやかな店が並んでいるが、とくに欲しいものもないので、市電乗り場まで往復しただけで構外に出た。通路でゲットした観光用の地図は英語表記のものしかなく、日本人も大事にしてくれよと切に願う。

地図とスマホのマップ・アプリを頼りに、広島県立美術館を目指した。都会の迷路のような路地と慣れないアプリに苦戦して、残暑の中、杖を頼りの歩行に疲労困憊、冷房の効いた美術館のソファに腰を降ろしたときは、しばらく立ち上がれなかった。

「特別展・古代エジプト」を開催中で、チケット売り場には長蛇の列ができています。迷ったが、せっかく来たのだからと常設展と特別展がセットになった入場券を購入した。

常設展の方から観覧する。奥田元宋の「青山白雲」、三次の奥田元宋美術館には何度も行っているの、知己に出会えたような嬉しさがある。平山郁夫の「黄河(晨)」、平山郁夫美術館を6月に訪ねるので親しみがある。展示品の一覧表を手にも、気になる作品にチェックを入れながら歩く。



条例上の名称は「広島サッカースタジアム」



敷地面積約 49,900 m<sup>2</sup>、収容人数約 28,500 人



広島大本営跡地に立つ記念碑



広島城天守閣（54号線の遊歩道より撮影）

鬘光（あいみつ）の「帽子をかむる自画像」、本物を見るのは初めてだ。がつしりとした体に小さな頭。日本人というよりも、大陸的なアジア人といった風貌で、見えない何かを見つめている。本名は石村日郎、広島県山県郡壬生町（現・北広島市）の生まれである。

特別展の方は渋滞がひどく、離れた場所から展示物を散見、人混みを縫って通り過ぎるだけで終ってしまった。それでも本物のミイラや棺は迫力があって、近くでじっくり見たかったと少し残念に思う。

美術館を出て西北方向に進むと広島城のお堀がある。橋を渡って裏御門跡から城内に入る。石段を上がって少し歩くと「広島大本営跡」の石

碑が立っている。かつて、広島が日本の“首都”だったことがあるのだ。

江戸時代に本丸御殿があった場所に明治10年、広島鎮台司令部として木造の洋館が建てられた。明治21年からは、第五師団司令部として使用された。同27年に日清戦争が勃発すると、同年9月に広島市に大本営が移されることになり、第五師団司令部の建物が明治天皇の行在所とされ、「大本営」が設けられた。明治天皇は約7か月滞在されている。

広島に首都機能が移転された理由は、当時の広島が西日本の鉄道の終点で、戦場の大陸に一番近い場所だったからである。宇品港（現・広島港）が軍港として整備されていたことも大きい。広島城に隣接する練兵場内

で、「広島臨時仮議事堂」が建設され、第7回帝国議会が開催された。国会が東京以外で開かれたのは、この1回だけだという。

明治天皇は日清戦争終結で帰京、首都機能は再び東京に戻された。広島大本営の建屋は史跡として残されたが、原子爆弾で倒壊。今は基礎石が残っているだけである。

石段を下りると広島護国神社がある。ここもインバウンドの外国人観光客が多い。表御門の橋を渡って城南通りに出た。真正面に、目的地向ある「エディオンピースウイング広島」の全貌が見えている。

サッカースタジアムの手前が、広大な芝生広場になっていて、大きなボールなどの遊具で子供達が遊んでいる。ゴールを設置すれば、ここでもサッカーができそうだ。

右手に広島城の天守閣がよく見える。別称は鯉城、広島カープの球団名の由来である。毛利輝元が築いた名城だが、やはり原爆で焼失。現代の天守閣は昭和33年に再建された。外観は初代天守を忠実に再現しているが、内部は鉄筋コンクリート製。それも今は老朽化して、法定の耐震性も満たしていないため、来年3月で来場者の入城はできなくなる。

昭和33年生まれ……、わたし

しと同年だ。わが身を慮って、あちこちにガタがくるのも仕方がないと思っただ。木造による本格的な再建が検討されているようで、後世に遺してほしい文化財である。

いよいよ最終目的地のサッカースタジアムだ。2階のコンコースに上がって、観客席のエリアに入場する。試合やイベントがない日は、こうして無料で開放されているようだ。そこそこ人も集まっている。

自動販売機で炭酸飲料を買って、人のいない場所を選んで観客席に坐った。座席の色はサンフレッチェ広島チームカラーの紫……、なのだろうが、派手さを抑えてかなり青味を帯びている。あちこち寄り道して、道にも迷ったので、かなりの距離を歩いている。足腰の痺れや痛みが増しているが、座位だと大丈夫。喉を潤しながら、グラウンドの緑の芝生を眺めていた。ボトルホルダーが前の座席の背もたれに取り付けてあるので利用する。

試合の様子や熱狂する観客の姿を想像してみる。サンフレッチェ広島熱心なファンではあるが、大観衆の中にいる自分の姿を思い描くことはできなかった。閑散としたスタジアムだからこそ、訪問してみたいと思った。最新鋭のサッカースタジアムでの贅沢で孤独な時間を、しばし堪能することができた。偏屈な老境の嗜好に、いくらかでも共感していただければ幸いである。

寄稿エッセイ

# 「虫ずが走る」

高柴順紀（菊栽培農家）

何故かへびは誰からも嫌われます。しかし今年には巳年、あえて比和の自然科学博物館の蛇の展示会で見た虫ずが走るような標本を紹介します。見たくもない人がいると思いますが、まあ写真を見てください。一九五六年十一月に比和で発見された双頭のアオダイショウです。

これを見た来館者の想いはわかり



ませんが、自分はこの異様な姿を見た瞬間、ヤマタノオロチ（八岐大蛇）が浮かんだのでした。東城、西城に伝わる比婆荒神神楽の「八重垣」と比和、高野に伝わる齋庭神楽の「八頭（やと）」で八岐大蛇が出てくるので、連想するのも当然だったのかもかもしれません。

もちろん八岐大蛇は古事記の記述が始まりです。作者はきつと気持ちの悪いへびから異形の「身一八頭八尾其長度谿八谷峽八尾」を発想して物語を進めたのかもしれない。高天原から追い出されて出雲国肥河の鳥髪の地に降り立ったスサノウは「八俣遠呂智毎年来喫、今其可来時、故泣」と悲嘆にくれる足名椎、手名椎の老夫婦と若い娘の話の聞き、「是汝之女、奉於我哉」とし、退治の方法を教えるのです。それは垣を巡らせた屋敷に八つの門を作り、それぞれに翁と媪（おうな）に酒を造らせた酒樽を置き、娘（櫛名田姫）をかんざしに変えて頭につけて大蛇が来るのを待

ちます。

「其八俣遠呂智、及毎船（樽）垂入己頭飲其酒、於之吞醉留伏寝。爾速須佐之男命、拔其所御佩之十拳劍、切散其蛇者、肥河變血流。故、其中尾時、御刀之刃毀」。この十拳劍（とつかのつるぎ）の刃こぼれの原因は尾の中から出た草薙の剣であったとして、八岐大蛇の話は終わっています。

後世になるとこの神話は色々と脚色されて物語や神楽などで語られることとなります。平家物語の「剣の巻」では古事記の草薙剣のその後の紆余曲折が語られています。最後に一人の博士が話した内容が面白いのです。

「むかし出雲国ひの河上にて、スサノウの尊に切殺されたてまつし大蛇、靈剣ををしむ心ざし深くして、八のかしら、八の尾を表事（しるし）として、人王（天皇）八十代の後、八歳の帝（安徳天皇）となって、靈剣をとりかへして、海底に沈み給ふ」。八という数字をキーワードとして神竜の宝となったと説明しています。

比婆荒神神楽の「八重垣の能」では別の伝承を加えています。スサノウの前に現れたのは田畑山を各千町持つ大長者の足名椎と手名椎でした。ある時、大千ばつになったため二人

は娘が八人もいるのだから一人ぐらいは人身御供にしてもよいから雨を降らせてくれと祈ると、それを聞いて大雨を降らせたのは八岐大蛇。八年の間に娘は一人だけになっていたのでした。スサノウは自分では酒が造れないから酒の神、松尾明神（マツノウサン）に頼むのですが、ここからが観客が待ちに待った楽しい神楽になるのです。退屈な神事に眠りこける夜半、神楽社一番の芸達者が茶利のマツノウサンを演じ、神楽場を笑い一杯にし夜明けを待つのです（「国譲りの能」ではイナセが同じような役をします）。

さて最後はスサノウは八岐大蛇から取り出した草薙剣を持って都に行こうとするのですが、死霊となった大蛇が鬼となり剣を返せと再びスサノウと格闘となります。降参した鬼にスサノウ、クシナダヒメとともに蛇徳鬼神祇園三社として祀るから草薙剣を守護せよと宮入りさせて能が終わります。

齋庭神楽の「八頭」も雨を降らせる大蛇です。また東城にも「八頭」の大蛇と同じ衣装と龍頭が残っている。元は同じで今は二つに分かれた双頭のへび神楽と言えるかもしれない。

## ハロー注意報 ㉓

——進駐軍がいた町のはなし

# 八幡神社の石段

松岡初枝

日本には八百万の神々がいらして、その地その地には産土神（うぶすながみ）の社（やしろ）がある。私の住む地は入間川八幡神社がそれにあたる。八幡神社の総本社は九州宇佐八幡で、御祭神は十五代天皇である応神天皇、戦の神とされ、当地の八幡神社には鎌倉時代の坂東武士、新



戦時国債券（番号の一部消去）

田義貞が必勝祈願した社でもある。その時義貞が愛馬を繋いだとされる「駒繋ぎの松」がある。もともと当時の松から数えて何代目かの松の木であるが、新田軍が祈願した様子が但し書きにもあるので、今のヒョロツとした松にも有難味があるらしい。

この社は小高い丘の上であり、町の人々が八幡山と呼んで親しみ、広い境内は子供達の遊び場でもある。太い松や杉の木に囲まれているので、夏場には涼やかな風と蝉の鳴く音が流れている。なにしろ高台にあるので、何度も雷が落ちた。光と雷鳴で身が竦む思いだったが「八幡様の大木のおかげでこっちに落ちないで済むんだよ」と皆で言っていた。我が家は八幡山から程近いので特に有難味があった。この社まで登るには七十一段の石段があり、その両側には手摺りがある。私の幼い頃にはこの手摺りが青竹で作られていた。

話は戦争中のことになるが、日本の元々少ない鉱物資源がいよいよ底を尽き、戦場で使う武器が不足してくると、各家々から鍋、釜、貴金属などを供出することになった。もちろん寺の釣鐘や石段の手摺り、火の見櫓（やぐら）の半鐘に至るまであらゆる金属が家々や町中から無くなった。それと共に戦費不足を補うための戦時国債も大量に発行された。今も何十枚もの債権が我が家に残っているが、祖母が歴史の一部だからと私に託してくれた。「あーあ、ただの紙くずになっただけさ、はっちゃんに持ってほしいんだよ。今は紙くずだけど、私達が必死で協力したんだよ」と言った。何もかもが戦争一色の時代だった。当時の詳しい事は戦後生まれの私は知らなかったが、幼い頃の記憶では寺の釣鐘は無いし、八幡様の石段の手摺りは青竹で、二年に一度程取り換えられていた。当時取り換えたばかりの青竹とした竹の美しさや、よい香りがする手摺りのことを今でも思い出す。

戦後も十年ほど過ぎた頃、八幡様の氏子達は、この見窄らしい竹の手摺りを、元々あったように金属製に作り換えようということになった。それには先ずお金が必要だ。氏子達も喜んで金を出せる人ばかりではないが、氏神様のためにと協議して、何とか話がまとまり実行に移した。やっと立派な金属製の手摺りが出来あがって、その記念に氏子の子供や孫達が稚児（ちご）行列をすることになり、私も参加することになった。「はっちゃんもお稚児さん行列に出るの？」と氏子総代の孫のマツ子ちゃんが言った。「うん出るよ。呉服屋のツトム君、新聞屋のヒロシ君、亀屋のヨシエちゃんも出るってさー」「そうなんだ、皆お金出したもんね。うちのお爺ちゃんが一番出したんだよ」「ふーん、総代だもんね」。マツ子ちゃんは得意気な顔をしたが、だから何なのさ…と思った。神様の下では皆一緒なんだと心の中で思ったけど、「マツ子ちゃんのお爺さんはすごいねー」と言っておいた。

昭和三十二年、私が小学三年の時にこの稚児行列が行われた。よく晴れた春の陽の中で、氏子のおじさん、おばさん達も皆盛装して子供や孫の晴れ姿に付き添った。マツ子ちゃんのお爺さんは黒紋付姿で先頭に立っていた。その日は朝から大忙がしの一日だった。近所の子供が我が家の店に集まり着付をするのだが、それはもうにぎやかだった。女の子のほ



ツトム君と私（筆者）



マツ子ちゃんと私。行事が終ってほんと大笑い！

とんどが七・五・三で着た晴れ着、男の子も五歳の時の晴れ着の肩上げや腰上げを伸ばして着用した。帯はしめずに神社の広間へ集合すると、化粧した顔の自前の眉毛の上に黒丸のぼう・眉を描く。最後の仕上げで女の子は頭に金色の天冠（てんかん）を冠り、男の子は金の烏帽子（えぼし）、さつき着た着物の上に表着（おもてぎ）を着る。萌黄色の長絹（ちようけん）を着ると、何だかとても厳かな姿となって、いかにも神に仕える稚児となったのだ。

「あー冠が重いよー」「何だかグラグラしそうだよー」、冠の下には小さな赤い布団を置いているが、姿勢が悪いとグラグラする。私は日本舞踊の舞台でカツラや冠物を付け慣れていたので、全く気にならない。「みんなー、背中を伸ばして頭をまつすぐにするの。歩く時はシズシズと、バタバタしないんだよー」。おばさん達は「はっちゃんはお稽古しているからねー。やっぱりこんな時には役立つんだよねー」と感心していた。

一旦八幡山から下りて、本町（ほんちよう）の広場へ集合し、そこから列を組んで八幡山まで歩く。いよいよ七十一段の石段を登るのだが、両側の真新しい手摺りがとても美しく輝いていた。何しろ生まれた時から知っていた竹製の見窄らしい手摺りとは大異いだ。青黒く輝く手摺りのせいか、石段も奇麗に見える。「前の日に氏子達で大掃除したんだもの。皆の着物が汚れるし、お偉いさんも登るんだものネ」。大人達は何日も前から準備して今日の日のために汗を流していたのだ。「六十九、七十、七十一…、あー、やっと着いたー」私より歳下の子供は慣れない着物姿で重い冠を冠っての石段登りは大変だったと思う。たぶん現代の子供達には無理かもしれないなーと今は思うが、当時の子供はまだまだ着物には少しばかり慣れていた。正月やお祭り、七夕の浴衣などが日常生活の中に着物が溶け込んでいた時代だったと思う。

社の前に正列して

宮司さんが祝詞（のりと）をあげ、お祓いを受け、氏子総代のマツ子ちゃんのお爺さんが恭しく、長々しい祝辞を喋っている頃には大欠伸（あくび）をする子もいて、クスクス笑ったら叱られた。やっと一連の行事が終り、写真を写したりお弁当を食べたり、さっさと冠を外したりする子がいたりして、やっと長い一日が終わったが、皆のほっとした顔と大人達の御神酒（おみき）が回った赤い顔がとても晴れやかだった。

社の前に正列して宮司さんが祝詞（のりと）をあげ、お祓いを受け、氏子総代のマツ子ちゃんのお爺さんが恭しく、長々しい祝辞を喋っている頃には大欠伸（あくび）をする子もいて、クスクス笑ったら叱られた。やっと一連の行事が終り、写真を写し



「坂巻探偵事務所……、探偵さんですか？」

名刺から視線を上げて、髭面の男の顔を見た。黒縁の眼鏡をかけた右目が白く濁っている。

「名前だけはかっこいいですが、ほとんどが興信所の下請けです。ときには家出した犬や猫を探すこともありますよ」

五十歳を超えているだろうか。黒皮のハンチング帽子から出ている髪は銀髪で、髭にも白いものがかなり混じっている。

「実は、こんなこともしていましたね」

ジャケットの内ポケットから、折りたたんだ紙を広げて見せた。重要指名手配犯のポスターだった。真ん中に大きく「捜査特別報奨金800万円」と書かれている。

小原辰巳の名前は、事件当時に地元で大きな話題になった。市内の山間の小さな集落に、小原の生家があったのである。強盗放火殺人事件の犯罪者を出した家ということ、様々なことが噂された。

ポスターに大きく掲載された顔写真、まだ二十七歳の若者である。警察が手に入れた写真は、それしかなかったのだろう。事件を起こした

のは四十二歳のときで、パソコンで加工したのか、「40代予想図」の顔がいくつか紹介されている。あの事件から、さらに十五年近くの歳月が経過している。

「賞金稼ぎということですか？」

我々のやりとりを聞いていた山本文吾さんが、ポスターを見て尋ねた。「まあ、報奨金目当てではありませんね」

坂巻氏が苦笑を浮かべた。

## 賞金稼ぎ

あきふゆひこ  
亜木冬彦

現代御伽草子 106

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

「八百万円も警察が出すのですか？」

文吾さんの物言いは直截だ。

「法令では一応、上限が三百万円になっていますが、特に必要であると認められた場合は、一千万円まで増額できるようです。しかし、小原には、被害者の関係者が『捜査に協力する会』という名目で、五百万円の報奨金を提示しています。警察の三百万円と合わせて八百万円になるという

わけです」

「そういえば、あの有名な『世田谷一家4人強盗殺人事件』には、二千万円の懸賞金がかけられていますな。それだけ捜査が難航しているということだろうが……。探偵さんは、何か情報をお持ちなのかな？」

坂巻氏の顔が一瞬強張って、そして小さくかぶりを振ると、無言でニヤリと笑った。

「市内の詳しい地図が欲しいんですけど、よね？」

最初の話題に引き戻した。「小原の実家に行ってみたいんです」

しばらく考えた。「地図はありませんが、場所はわかっています。うちの車で案内しましょうか？」

「お願いします」

坂巻氏が深々と頭を下げた。

軽ワゴン車に坂巻氏を同乗させて、小原の生家に向かった。山越えの県道から、つづら折りの狭い林道を登って行くと、小さな集落がある。その一番奥まった場所に小原の実家があった。蔵を備えた大きな農家だ。

軒先に車を停めて、二人、外に出た。坂巻氏が玄関の扉を開けようとしたが、当然鍵がかかっている。縁側にはきっちり雨戸が閉めてある。

（家の管理をしているのは誰だろう？）

唯一人の相続人が指名手配されて、行方不明なのである。

「家の周辺をしばらく調べさせてください」

坂巻氏がそう言って、家の裏手に回った。

（家の中を調べるつもりはないのか？）

探偵道具でも取り出して、鍵を開けるシーンを思い描いていた。

庭に赤いサザンカが咲いている。その枝をいくつか折ると、少し離れた場所にある小原家の墓所に向かった。花立てにサザンカの枝を差し入れて、持参した線香の束に着火して墓前に供えた。



「加代子さん、ご無沙汰しています」  
合掌して、こうべを垂れた。本好きで、わたしの店の常連だった。足を悪くして店に来られなくなる、電話で読みたい本をリクエストした。家まで本を届けると、本代と一緒に、お車代だと言って自家製の漬物を持たせてくれた。その味が絶品で、漬物が無くなると、加代子さんの電話を心待ちにしたものだ。

立ち上がって振り返ると、いつの間にか坂巻氏が立っていた。顔

を歪めて、涙を流している。

いきなり墓石の前に正座した。そして、額を土にこすりつけて平伏した。土下座である。

「母さん、ゴメン……」

嗚咽が聞こえてきた。

「いつから気づいていたんだ？」

山本文吾さんが尋ねた。

「確信があったわけじゃあなかったんです。少し尖っている耳の形がね、加代子さんによく似ていたんです。指名手配犯のポスターの写真を見て、あらためてそう思いました」「おれはまったく気づかなかったよ。指名手配犯のポスターの写真とはまったく顔が違っていたからな。整形でもしていたのか？」

「病院から足がつくのが怖くて、整形はできなかったそうです。髭を生やして、右目に白濁したコンタクトレンズを入れて眼鏡をしたら、自分でも驚くほど印象が変わったそうです。今まで一度も疑われたことはないと自慢していました」

「初対面では、まずあの目に注意がいくからな。探偵というのもうまい隠れ蓑だ。偽名がバレても、調査のためだと言えばごまかせる」

缶コーヒーを口に運んだ。

「しかし、やばい橋を渡ったもんだ。指名手配されている殺人犯と、二人きりで山奥の空き家に行ったんだからな。怖くはなかったのか？」

「半信半疑だったんですよ。もし彼が本当に小原辰巳であれば、どうしてこんなことをするのか興味がありましたしね」

そのことは直接、本人に訊いた。わたしに報奨金を受け取らせるつもりだったらしい。母親とは密かに連絡を取っていて、わたしのことも母親から聞いていたようだ。それとなく情報を流して自分の正体に気づかせて、わたしが警察に通報するように仕向ける……。

「八百万円は大金だぞ。後悔してらんじゃないのか？」

実は、それで坂巻氏、いや、小原辰巳と大いにもめたのだ。彼は、わたしが警察に通報するように強く求めた。わたしは、自首を薦めた。その方が刑が軽くなる。平行線が続き、報奨金の五百万円は被害者の関係者が提供していることを指摘して、そんな金は受け取れないと言うと、ようやく彼は納得してくれた。

「罪を憎んで人を憎まず」

文吾さんが缶コーヒーを掲げて、うまそうに飲み干した。

## まちの古本屋さん どろ書房

古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

- ・ 無料本、百円本、50円本などのコーナー。
- ・ 地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。

※九日市の開催日は定休日でも開店します。

- 庄原市中本町 2-1-10
- 定休日：毎週日・月・火曜日
- TEL: 090(9913)3052
- 営業時間 9:30～18:30 (昼食休憩 12:00～12:30)

※広島銀行庄原支店の手前(三次側から) ※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

# 「旧暦」のカレンダーを見る

古川行洋

## 第五部 人物を見る

十月廿四日 関孝和没

江戸前期の和算(数学)者である。

寛永十九(一六四二)〜宝永五(一七〇八)年。通称は新助、字は子豹、号は自由亭。内山七兵衛永明の次男に生まれ、のちに関五郎左衛門の養子となって、新助と名のるようになった。

甲斐國甲府藩士で、徳川綱重とそ

の子綱豊(六代將軍家宣)の家臣。甲府で勘定吟味役、江戸城で御納戸組頭を勤め、三百俵が支給されている。

彼の和算上の最大の功績は、そろばんや算木による数学に対して、筆算による代数演算法―演段術―を發明したことである。さらに行列式、円周率、球の体積、極数、角、方陣、円理などの多方面にわたって、和算を体系的に発展させるうえで、画期的な役割をはたした。

十一月十五日 龍馬生誕・暗殺

坂本龍馬、天保六(一八三五)年に生誕、慶応三(一八六七)年に暗殺される。

幕末期の、土佐藩出身の尊攘派の志士。高知城下の酒屋に生まれたが、家業を弟に譲って郷士となった。嘉永六(一八五三)年十九歳で江戸に出て、千葉周作に剣術を学び、文久元(一八六一)年尊攘志士武市瑞山の呼びかけで土佐勤王党に入った。文久二(一八六二)年尊攘派に対す

る土佐藩の圧迫が加わり、これを不満として脱藩した。

再び、江戸に出て、幕府軍艦奉行勝海舟を殺すつもりで面会した。しかし、航海論に心酔して勝の門下に入った。そして、海軍術を会得し、人脈も深め、後の「商社」につながる「社中」を組織した。慶応三(一八六七)年に「社中」は土佐藩から公認され「海援隊」と改称し、業務をさらに発展させた。一方、中岡慎太郎とともに薩長同盟締結を仲介した等がある。

かくて、新しい統一国家建設のための実践綱領を想定した龍馬であったが、大政奉還から一カ月後の慶応三(一八六七)年十一月十五日、京都四条の醤油屋近江屋で、幕府側の見廻り組の手により中岡慎太郎とともに斬殺された。

十一月二十八日 親鸞忌

鎌倉初期の僧。浄土真宗の開祖。承安三(一一七三)〜弘長二(一二六二)年。初名を範宴・善信房・綽空(しゃくくう)などと称し、見真大師と諡号(しごう)されている。『親鸞上人絵伝』などにみえる日野有範(ありのり)の長子とされている。少青年期を、叡山の堂衆として修行した。建仁元(一一〇一)年二十九歳

のとき、法然に接して生涯の感銘をうけ、他力易行の門に入った。元久元(一二〇四)年法然の念仏教団に弾圧が加わり、法然は叡山に七箇条起請文を出した。それに親鸞も連著しているということで、承元元(一二〇七)年法然は土佐に流罪、親鸞は越後国府に流された。以後、常陸など関東各地で教化に努めた。在家生活を肯定し、自らも恵信尼と結婚した。

寛喜三(一二三一)年以後、親鸞は単身京都に戻って舎弟尋有(じんゆう)の坊に仮寓した。この五十七歳ごろから九十歳で亡くなる晩年は、困窮にひるむことなく、関東からの些細な仕送りをうけつつ、関東に残した信徒のため、『教行信証』『愚禿鈔(ぐとくしょう)』などの著述と教化に専念していった。

親鸞の説教は、師法然の教義をさらに徹底させたもので、念仏により、臨終を待つことなく往生が決定する、その後の念仏は、安心と報恩であって、その他はすべて雑行としている。また、教団を結成する気持ちも、弟子や寺を持つとうとする意志もなかった。門徒は弟子でなく、自分は開祖でなく、みな同じように弥陀につながるものとしていた。



# ヨーロッパ23日間「卒業旅行」(14)

## マック☆ヤマザキ

3月3日土曜日、インターラーケ  
ン〜ルツツエルン(スイス)〜フイ  
レンツエ(イタリア)。日本は桃の節  
句の日である。

昨夜の学生の遅い帰宅騒動の動揺  
が残っていたのか、早く目が覚めた。  
出発の準備に取り掛かっていると、  
モーニングコールの電話が鳴った。  
午前4時30分。6時の出発までに学



生たちがしなければならぬことは、  
自分のスーツケースを宿泊客の迷惑  
にならないよう、静かに、静かに、  
エレベーターを使ってロビーに降ろ  
すこと。

我々の出発時間が早すぎるため、  
パン、バター、ジャム、そして紙パッ  
ク入りジュースをバスの中で食べれ  
るようビニールの袋に入れて、全員  
分が用意されていた。そのうえ、食  
堂で温かいコーヒー又は紅茶だけで  
も飲めるように心配りしていただい  
た。

ホテルを出るとき、オーナー夫人  
はまるでわが子を送り出す母親のよ  
うに感じられ、目頭が熱くなった。「ご  
主人に、いや、フアーザーによるし  
く！」と言ってバスに乗り込んだ。  
日本に帰ったら、お礼の手紙を出さ  
なければと思った。でも、今まで実  
行したことがほとんどないのだ。忙  
しにかまけて不義理をしてしまう  
……。しかし今回は帰国後、出発す  
る時にフロントデスクで撮ったオー

ナー夫人との写真と、私の家族の写  
真を入れて、礼状を出すことができ  
てホッとしている。

外はしんしんと雪が降り続いている。  
バスはチェーンをつけていなかった。  
た。ドライバーの名はハンス、いつ  
もの通り運転手さんの紹介をすると、  
彼はハンドルから両手を放し“バン  
ザイー”の態勢で運転席で立ち上が  
り「グッドモーニング」、みんな度肝  
を抜かれていた。

昨年の卒業旅行でも、同じように  
彼が挨拶してくれた。昨年はルツツ  
エルン駅へ向かうのに山越えの近道  
だったが、今年は例年になく豪雪と  
ハリケーンによる倒木などで通行不  
可、ベルン(スイスの首都)経由の  
高速道路にするとハンスが言った。

ルツツエルン駅に到着、まるで冷  
凍室に入ったような外気温だ。列車  
を待つ間、白い息が飛び交い、足元  
からは強烈な寒気がジンジンと伝  
わって来た。列車が入る前に男子学  
生がスーツケースを通路に整然と並  
べる。女子学生達は隣の車両のデッ  
キから乗り込んで、自分の席に移動  
してもらった。名誉教授のK先生のエ  
スコートもお願いした。

車両の片方は通路で、もう片方に  
は6人用の簡易寝台・クシエットが

ある。窓側の通路にスーツケースを  
並べ、収納しきれないものはクシエッ  
トの3段目に収納した。通路のスー  
ツケースが盗まれないように見張り  
役も指定。かくして、北側にドイツ、  
西側にフランス、東側にオーストリ  
アとリヒテンシュタインが位置する  
中、南側のイタリアに向かった。

実は、我々のクシエットには他の  
乗客が座っていた。彼らとすつたも  
んだとやり取りして、コンパートメ  
ントから出てもらうことができた。  
しかし、3時間近く通路に立ってい  
た彼らからガラス越しに丸見えだ。  
特に女子学生達は品定め的好奇の視  
線にさらされ、精神的な圧迫を感じ  
続けていただろう。何事にも几帳面  
な日本人との感覚の違いを思い知ら  
された。

土曜日の午後だったので、途中の  
駅からの乗客が増えた。降車駅が近  
づいて、各部屋の頭上のスーツケー  
スを事前に降ろした。フィレンツエ  
到着時の手順を指示。列車が止まる  
と、体格の良い体育会系の学生がスー  
ツケースを持ったまま最初に降りて、  
学生達が次々とスーツケースをリ  
レーして流れ作業を開始。最後のスー  
ツケース担当の学生がホームに降り  
て大成功!!

## どらくる俳壇&歌壇

※参加を歓迎します。

この県の一番奥の藁塚を築く

近藤 昌平

栗拾う小箆で足りる栗の飯

原博己

早朝の空一面に鱗雲

片岡 正人

軒下の天日に映える吊るし柿

隆愚

通院の帰りは一尾生秋刀魚

大槇 三代子

頬杖をついて句作の余寒かな

寺内 龍二

古本屋読書三昧日が暮れる

赤川 冬人

口元に皺目元にも皺吾が顔の

松岡 初枝

それも宝よ笑みて生き生く

## 投稿&寄稿

候のことば

「初時雨」  
はつしぐれ

隆愚

暦の二十四節気七十二候で、新暦の十月二十八日から十一月一日頃を「霜降」の「次候」で、「霎時施」(しぐれときどきほどこす、または、こ

「時雨」(しぐれ)は降ったりやんだりする通り雨の事です。万葉の頃は晩秋の雨ととらえられていました。が、次第に初冬の雨と思われるようになりまし。葉を散らす雨になっていったというわけです。この頃は

「ひと雨一度」といわれるように、雨が降るごとに、気温が一度下がっていきます。

不意に強い雨が降りかかり、見る間に去っては青空が広がる時雨は、晩秋から初冬にかけての空模様。ひとところだけに降る片時雨や、横なぐりの横時雨、また訪れる時々で、朝時雨、夕時雨、小夜時雨など。

その年の秋の初時雨は野山のいきものも人々も、そろそろ冬支度を始める合図です。

旅人と我名よばれん初しぐれ 芭蕉

「スペシヤル！」 赤川仁洋

連載企画で芸備線、木次線の周辺を散策するようになって、なるべく地元のものを買うようにしている。一駅区間の運賃しか払っていないので、その埋め合わせもある。しかし、存続が危ぶまれている過疎地の路線なので、店も少ないのだが……。

出雲三成駅の駅舎に入っている「仁多特産市」の店で、「赤川茶」と「ほんにまい酢」を購入。自分の姓と同じお茶と、地元のお米を使った酢？ わたしの古本屋の店頭で野菜の無人販売をしているのだが、夏場に出荷されるキュウリを酢のものにして

食べようと思った。しかし、調理するのが面倒で、マヨネーズや味噌をつけて生のまま食べてしま。せつかくのこだわりの酢が、シンクの下に放置されて一年以上、すでに賞味期限は過ぎていた。

来客用のアイスコーヒーのシロップが余っていた。この酢にシロップを加えて、炭酸水で割ってみた。「うまい！」、酢の主成分である酢酸は、食品添加物として清涼飲料水によく使われているが、このスペシヤルドリンクにはコクとうまみがある。はまってしまい、ひと夏で一リットルのペットボトルが空になった。おかげ様で猛暑を乗り切ることができた。



# どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など  
情報掲示板です。

## — 硬式テニス参加者募集 —

MTEC (Miyoshi Tennis Enjoy Club)

場所：三次運動公園の屋内&屋外コート

- ・火曜日 (9:30 ~ 12:00)
- ・水曜日 (9:30 ~ 12:00)
- ・土曜日 (10:00 ~ 12:00)



## 《情報&原稿を募集します!!》

- 仲間募集
- 教室&講座案内
- イベント情報
- あなたの大切な本の紹介
- ボランティア・ライター(現地記者)募集!

※応募先はどら書房・赤川まで。  
掲載は無料です。

## どらくろあ ホームページ

バックナンバーも掲載して  
いるので、ダウンロードして  
お楽しみいただけます。



<http://shobara.wix.com/dorakuroa>



## 「旧暦カレンダー」(販売価格:1,650円)

- ・日本の自然に根差した暦(こよみ)です。
- ・太陽暦でも太陰暦でもない、「太陰太陽暦」です。
- ・新暦(太陽暦)も併記しているので便利です。
- ・季節の行事や呼び名の意味が、より深く理解できます。
- ・自然災害の予測ができます。

## どら書房にて令和8年度版 予約受付中!

(12月初旬入荷予定)

※本誌特別連載の古川行洋氏推奨。

## 「ぐんぐん伸びよう会」

(教室：庄原市川西町 241 連絡先：080-3631-9125 やないたえこ)

**黒板のない教室、学年の枠のない教室、一人ひとり自分の能力にあった内容を学習する教室**

ここ「ぐんぐん伸びよう会」の教室では、ピアノ、習字、スイミング等と同様に、  
一人ひとりに合った内容を学習して**スモールステップで進んでいきます。**

多くの子ども達に**「やればできる」という成功体験**を味わってもらい、  
目がキラキラした子ども達で、この地域がいっぱいになってほしいと願っています。



**無料体験学習受付中!!**

発行：どら書房  
〒727-0012  
庄原市中本町 2-1-10  
☎090(9913)3052(赤川)  
e-mail:touzin@nifty.com

誌面デザイン：ROUTE183  
協賛：九日市愛好会

## 編集後記

◇長い残暑がようやくおさまったかと思つたら、朝晩の冷え込みで、気温差に体が悲鳴を上げています。腰の具合が悪化して、病院でMRIの再検査。12月号では「木次線ストロール」を再開したいのですが、歩く元気があるかどうか弱気になっていきます。残りは4駅なので、最後までレポートしたいですね。

◇サンフレッチェ広島、リーグ戦の方は厳しそうですが、YBCルヴァンカップの決勝は頑張つてほしいですね。今は野球のワールドシリーズに一喜一憂しています。カープには来年に期待。

◇秋本番、店の前の歩道にはたくさんのお落葉が舞っています。そうじが大変(苦笑)

第 289 回

# くんちいち しよばら九日市

毎月九日に開催されている街角市場です。発祥は天正年間（1573～1591）、織田信長が安土城を築いたり、豊臣秀吉が大阪城を築いたころ、物々交換の市（いち）として始まりました。その歴史ある市が2001年に復活、地元の出店はもちろん、近隣他県からの出店＆名産品で賑わっています。



◇どらわこ・ミニライブ◇

※ツイン・オートハープ演奏&唄

10時～30分 場所:内海宅

11月9日(日)

9:00～13:00

TOPICS(開催場所は裏面の地図参照)

★市民ギャラリー「アート多愛夢」  
11月7日(金)～9日(日) 10時～16時  
(最終日9日は9時～15時)  
「森原多美子水彩画展」

★どら書房、休憩室あります。

★HONMACHI STAND→コーヒー100円引き

★カフェクラウドにて「庄原ジビエランチ」販売！  
※広島県立大学・吉野研究室主催、1000円15食限定

★お休み処(まちなか広場)あります！  
九日市で買った昼食をゆっくり食べてください。  
※ゴミ箱用意しています！

★あなたも自分のお店を出してみませんか？(出店者募集中！)

\*出店申込みは、【毎月20日締切】 コンパネ1枚スペース1,200円～  
九日市愛好会事務局 TEL/FAX(0824)72-8285  
〒727-0013 庄原市西本町2-1-10(楽笑座内)

【ホームページ】  
<http://www.kunchi-ichi.jp>

